

キ〇タマ球技大会！

男女対抗サッカー、ボールは同時に二個使用！
男子は一人、女子六百人！
最後は一万以上の観客が乱入して
男子一人を金潰し！



玉子王子 著

1章 金蹴りでもめげないゴキブリイケメンのかっこいい青春（笑）

「ちきしょうが！ ぶち殺す！」

カメラを床に叩きつける少女。

九義女子校の更衣室。

殺気立つ半裸の少女たち。

「また盗撮かよ、あのクソが！」

「渡辺のキ〇タマは、潰すしかないよ！」

「まあ、何度も潰してるわけだけど」

ナノテクノロジーが発達し、大抵の傷はすぐに治る世界。

少し前まで、玉が潰れた場合再生に十時間というところだったが、最近十秒で治る最新の薬が出回り始めていた。

玉が治る、というのは男にとっては「万が一潰れても助かる」ということである。

しかし一部の女たちは「睾丸が潰れても治るのか、なら潰してもいいな」というふうを考える。

更衣室にいる少女たちは元々そんな風を考えることはなかったが、今ではそれが普通になっていた。

その理由は、一人の男子の存在だった。

小中高大一貫校である九義女子校はもちろんその名の通り女生徒しかいないはずだった。

しかし、今年高等部に書類ミスで一人の男子が入ってしまったのだ。

「おいおい、何騒いでるんだ？」

ガラ、と当たり前のように戸を開ける少年。

一年だが、すでに大人の背丈がある。

顔は極め付きいい。

前髪を左右に分けた黒髪短髪、知的イケメンという雰囲気だ。

女子だけの学校にそんな男子がいれば当然アイドルのはずだ。

が、彼を見る少女たちの目は殺気か、さもなければゴキブリに対するような嫌悪しかなかった。

「開けてんじゃねーよ！ ゴキメンがよ！」

ゴキブリのようなイケメン、という意味だった。

「おっと、うっかりしておったわ」

ピシャ、と戸を「閉めない」渡辺。

ある程度閉めるが、少しあけたままにして、そこから中を覗き続ける。

痴漢、覗き、盗撮……彼が入学してまだ三ヶ月だが、その間に彼が積み上げた**性犯罪**の履歴は、彼を唯一の男子にしてイケメンというアイドルからゴキメンに転落させるに十分だった。

それでも、彼は何も気にしない。

アイドルの時にそれを利用して女を食いまくろうなどとはせず、今もゴキメンと呼ばれていても平気。

マイペースといえ言える不思議な男だった。

「戸を閉めるクソ野郎が！」

「またキ○タマ潰してやろうか！」

「去勢だよ去勢！ お前にふさわしいのは去勢しかないんだよ！」

「気づいたか」

舌打ちして戸を閉める。

「……て、別に「去勢しかない」と気づいたってわけじゃないぞ？ 戸が開いてると気づいたか、ってことだ」

独り言を言う渡辺。

と、その後ろに長身の女性。

体育担当の女教師大塚。

女教師と言っても、男性教師はいないのだが。

教師だけではなく、事務員の類もすべて女性。

つまり、完全にこの学校に男は渡辺一人なのだった。

極め付きのイケメンでその状況。

本当に、すましているだけで天国暮らしだったはずだ。

本人もそのぐらいわかっていたはずだ。

にもかかわらず、それをなぜ棒に振ったのかは大きな謎だった。

「あ、大塚先生。今日もオッパイ大きいですね！ おほ」

「本当に去勢するしかないな。まあ何回もしてるけどな」

「酷いなあ」

モミモミモミモミモミモミと、もうしつこいぐらい女教師の巨乳を揉みあげつつ顔は冷静なイケメンの渡辺。

初めてこういうセクハラを食らったとき、女教師は戸惑いつつも、このイケメンの若者と何かあるかもしれないのは美味しいのではないかと思った。

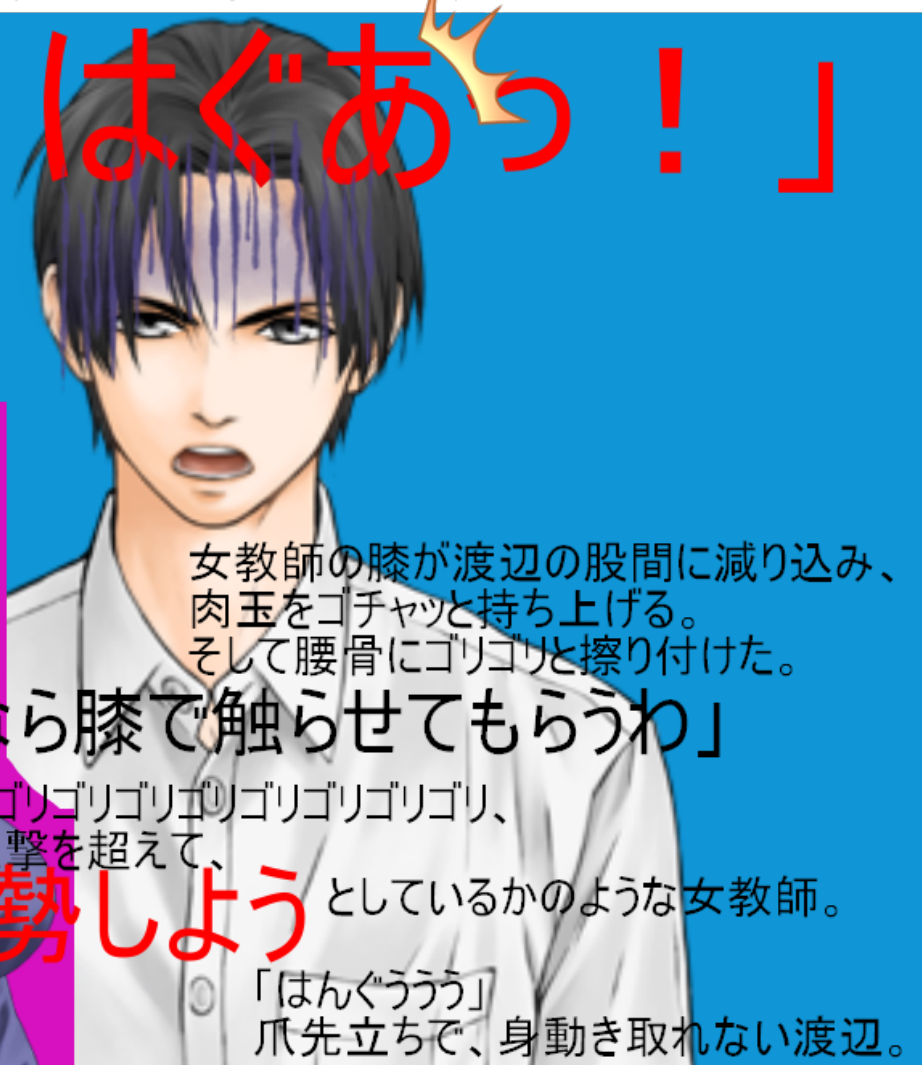
だが、彼のセクハラがほとんど無差別であることを知ると、ただ嫌悪しか残らなかった。

「なんならお詫びに俺のチ○ポ触っていいですよ？ はぐあっ！」

「なんならお詫びに俺のチ○ポ触っていいですよ？」



はぐあっ！」



女教師の膝が渡辺の股間に減り込み、肉玉をゴチャッと持ち上げる。そして腰骨にゴリゴリと擦り付けた。

「なら膝で触らせてもらおうわ」

ゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリ、セクハラへの反撃を超えて、本気で去勢しようとしているかのような女教師。

去勢しよう

「はんぐううう」
爪先立ちで、身動き取れない渡辺。



女教師の膝が渡辺の股間に減り込み、肉玉をゴチャッと持ち上げる。

そして腰骨にゴリゴリと擦り付けた。

「なら膝で触らせてもらおうわ」

ゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリ、セクハラへの反撃を超えて、本気で去勢しようとしているかのような女教師。

「はんぐううう」

爪先立ちで、身動き取れない渡辺。

それが白目を剥きそうになって、やっと足を下げる女教師。膝を突く渡辺。

それを氷のような目で見下ろす女教師。

「ん？ どうした渡辺？ 腹でも痛いのか？」

「ぬぎぎぎ」

「股間押さえてどうした？ 皆みたいに女になりたいのか？ いつでも手伝ってやるぞ」

「へへ、なら男になるの、手伝って貰っちゃおうかな？」

肉玉から腹にかけての激痛に顔をゆがめつつ、膝立ちのまま手を伸ばし、女教師の尻に伸ばして撫でる。

「女にしておけ」

ゴチャ、と音を立てて、女教師の足が渡辺の股間を踏みつけるように蹴る。

唇を噛み、目を見開く渡辺。

「ほぐあああああああああ！」

股間を押さえ、その場に転がって痙攣する。

舌打ちする女教師。

彼女にはよく分かっていた。

——今の蹴りで仮に二個玉潰れようがこいつは何も変わらない。もっと荒療治でないと。

全女生徒と女教師と女性職員にゴキブリ扱いされてなお平然とセクハラしまくり、肉玉を蹴られようと玉を潰されようと平然と同じ行動をとり続ける、ある意味で不屈の男。

それを何とかするには、並大抵の方法では無理だ。

そもそも、そんな方法があるのか疑問だった。

着替えが終わった生徒たちと校庭に出る。

九義は小中高大一貫校で、総合グラウンドを中心にそれぞれの建物が並んでいる。

女教師らがいるのは高等学校だった。

正面は大学、右側が中等部、左側が小等部だ。

それぞれグラウンドはもちろんプールまである。相当大きな学校だ。

大体大学以外は一学年二百人ほどいる。

小等部は千二百、中高は六百人ずつ。

大学は千人。

若い女ばかりが三千人以上いる。

しかも、教師も職員も全員女性。

そういう場所なので侵入者への対策はしっかりしている。

外からの盗撮も無理だ。

総合グラウンドに整列する一クラス四十人。クラスはもちろん全部で五つだ。

が、一緒に何かやることはあまりない。

「それじゃ、今日はサッカーだ」

思わずため息が出る女教師。

仮に全裸でサッカーをやっても、外から見られることは絶対にない。建物の配置や壁によって守られている。

完全な密室と言っていい総合グラウンドだ。

しかし中にいるゴキブリの目から隠すことは出来ない。

ゴキメン渡辺は一年A組だ。そこを見ると、窓から誰かが見ているのがわかる。

「もう授業中だろうが」

しかし、若い女がスポーツしている見ものは見逃さないだろう。

「あいつがいるせいで、外から密室になってる事が意味がない。いや、意味がないことはないが、かなり価値が減るな……」

「え？ あ！ ゴキメンこっち見てる！」

「え？ あ！ **ゴキメン** こっち見てる！」

教師の眩きに、
校内でもっとも嫌われている人間の動向を察する少女たち。
誰かが指をさすと、全員がそちらを見る。
それに気づくと、渡辺は嬉しそうに手を振ってくる。

もちろん、少女たちは目を吊り上げる。
「やっぱりさっきキ○タマ潰しときゃよかった！」
「降りて来い！ 去勢してやるから！」

「腐れキ○タマが！」
「デカチ○ポ引っこ抜いてやるよ！」
「キ○タマ潰す！ キ○タマ潰す！」



唾を飛ばし、腕を振り廻し、
地面を蹴飛ばし、殺気立つ女子たち。



教師の眩きに、校内でもっとも嫌われている人間の動向を察する少女たち。

誰かが指をさすと、全員がそちらを見る。

それに気づくと、渡辺は嬉しそうに手を振ってくる。

もちろん、少女たちは目を吊り上げる。

「やっぱりさっきキ○タマ潰しときゃよかった！」

「降りて来い！ 去勢してやるから！」

「腐れキ○タマが！」

「デカチ○ポ引っこ抜いてやるよ！」

「キ○タマ潰す！ キ○タマ潰す！」

唾を飛ばし、腕を振り廻し、地面を蹴飛ばし、殺気立つ女子たち。

見ているだけでそこまでの反応をされると渡辺が不憫な気もする。

しかし、殺気立っている少女の中に一人として、渡辺に尻や胸をさらわれていない者はいない。

そして多分、渡辺の玉を潰していないものもない。

そんな関係では、体育をやっているところを見ているだけでも「性的な目的で覗いている」としか考えられなくても仕方ないだろう。

だが、そんな関係でも渡辺は平気で、マイペース、今日も登校時のすれ違いざまに尻を撫でられたものは一人ではない。

だから余計こういう反応もされる。平気だからまた触る……悪循環といえるだろう。

「みんな、落ち着け」

「先生！ 何とかならないんですか！」

「普通、治ると言っても一回キ〇タマ潰されればしばらくは大人しくなるんだが……確かあいつ、昨日、三回ぐらい玉潰されたよな？」

「っていうか今日の朝も潰されてましたよ！」

「不屈すぎるなあいつ……もっと決定的に思い知らせないと。でも、どうすりゃいいのかねえ」

「学校内は密室だから、何かしても皆で口裏合わせれば……」

誰かがボソリという。

静まり返る。

しかし、なにをするというのか。

何のアイデアもない。

——まさか、問答無用でさらって二、三日連続キ〇タマ潰しってわけにも行かないからな。

何とか合法に済ませたい。

だが、そう都合がいい案などない。

ため息をつきつつ、手を挙げる。

「皆、切り替えて、サッカーだ」

「切り替えられませんよ！」

「くっそー！ ボールがいあつのキ〇タマならなあ！」

思わず、女教師はその生徒を見る。

「そうか、サッカー……キ〇タマサッカー」

その呟きに、近くにいた少女が嘔き出す。

「ちょ、先生何言ってんですか！」

「何々！？」

「先生がさ、キ〇タマサッカーだって！」

「ちょ、マジすか！」

「ぎゃははは！ そりゃあいつのキ〇タマでサッカー出来たら最高でしょうけど！」

腹を抱えて笑う少女たち。

実際「はいどうぞ」と渡されたら気絶するだろうが。

冗談以外の何者でもない、ただの気紛れ。

そう少女たちは思った。

だが、大塚はそうは思わなかった。

「ん……いや、いい案じゃない。これ、使えるわ……」

ぶつぶつと呟き始める女教師。

この瞬間から、ゴキメン渡辺の痛みに満ちすぎた一日「キ〇タマサッカー」の日が始まったのだった。

体験版終わり

この後ゴキメン報いの「金蹴りサッカー」という名の去勢リンチ
さらに観客として見ていた他の学部の少女たちが続々去勢リンチに乱入、
その上、客と呼ばれていた近所の主婦たちも
普段のゴキメンのセクハラへの怒りをこの機会に彼のキ〇タマにぶつけます

続きは製品版でお楽しみください